



Interview No.20

「“きついことはあっても、それに負けないくらいのやりがいや楽しさがある”ことを伝えたい」

外注ラボと院内ラボ、ほとんどの歯科技工士がこのどちらかに勤務していると思われる。さらに同じ外注ラボでも、少人数のラボと多くの歯科技工士が勤務するラボでは、その環境は大きく異なるのではないか。どの環境にもメリット・デメリットはあると思われるが、それぞれの中でどのように歯科技工士としての充実感を得るか、何より患者に寄与することができるかが、もっとも重要であると思われる。

今回インタビューを行った河野氏はどのような環境で、どんな考えで歯科技工を行っているのでしょうか？

歯科技工士

河野雅聡

福岡県・株式会社愛歯
福岡営業所

このの・まさとし

1977年生まれ。

1997年、福岡医科歯科技術専門学校卒。

専門学校時代に株式会社愛歯の社員に勧誘されたことで同社に入社。「患者にとって最良の補綴物を製作できるようになりたい」という想いで、歯科医師とコミュニケーションを取りながら、歯科技工に打ち込んでいる。



「患者にとって最良の補綴物を製作できるようにになりたい」

専門学校時代、現在勤務している株式会社愛歯(以下、愛歯)の社員に歯型彫刻をみせたところ、

「卒業後、ぜひ愛歯でセラミックスをやって欲しい」

と勧誘されたという河野。卒業すぐに、熊本にある本社に就職した。

大型ラボである愛歯は、扱う補綴物によって明確に担当が分かれており、同期の中で河野ひとりだけが入社直後からセラミックスの部署に配属されたという。

当時の河野は、特にセラミックスへのこだわりがあったわけではなかったが、上司が歯科医師から指名を受けて自費のセラミックスを製作しているのを見て、依頼された仕事をこなしていくだけではなく、

「患者にとって最良の補綴物を歯科医師とともに設計し、製作できるようにになりたい」

と興味をもつようになっていった。だが、気持ちではそう思っているにもかかわらず技術はついていかない。卒業直後の河野の技術では求められるレベルには程遠く、基本を学ぶために保険の技工を行う部署に異動することになる。結局、セラミックスの部署に戻ってきたのはそれから4年後であった。

「患者に笑顔を」

セラミックスの部署に戻ってからの河野は、入社当初にみた先輩のように、歯科医師とコミュニケーションを取りながら歯科技工を行うようになっていく。そ

んな中で特に苦勞したのが、手探りで製作したというプロセラ・インプラント・ブリッジ(ノーベルバイオケア、以下、PIB)の初症例であるという。患者は事故で上顎の歯をすべてなくしてしまった若い女性であった。骨などの条件も良く、歯科医師はPIBを選択したものの、日本ではまだ認可されていない時期で、米国ラスベガスのワールドカンファレンスでスキニングし、発注を行った。河野も何度も医院へ立会いに行き、また歯科医師と相談しながら、試行錯誤を重ねて製作したという。そして装着の日、鏡をみた患者がにこっと笑ったのをみたとき、これまでの疲れや苦勞が吹き飛んだという。この喜びは大きいケースに限ったことではなく、どんなケースでも変わらない。

「その患者の人生からみたら小さなことかもしれないけど、その一瞬を笑顔にできたことが嬉しい」

と河野は話す。

「大型ラボのメリット・デメリット」

学校卒業後から現在まで愛歯一筋の河野だが、ひとりで黙々と仕事をしたいと考えるわけではない。しかし、それと同時に大型ラボ勤務のメリットも確かに感じている。そのひとつとして、多くの歯科技工士との“繋がり”が挙げられる。歯科技工士は個人の技術を中心とした作業が多い。そのため、どうしてもひとりラボで仕事をしていると、コミュニケーション能力が乏しくなりがちになるのではないかと感じているという。その点、大型ラボでは、

「多くの先輩たちから指導を受けたり、また若い人に

指導することによって、自分自身が人として多くのことを学び、成長することができる環境」

だと感じているという。逆にデメリットは、院内ラボなどと比較して、患者と接する機会が少ないこと。ラボで仕事をしていると、どうしても視野が狭くなってしまいがちになる。そこで、

「自分が相手にしているのは硬い石膏ではなく、患者なのだ」

とイメージすることをたいせつにしているという。石膏の先にある患者をみていなければ、歯科技工士の自己満足になってしまうからである。

「異動と考え方の変化」

入社して10年の節目を迎え、福岡営業所の社屋が完成したのを機に、河野は福岡営業所に異動になる。福岡では大学病院の仕事をする事が多く、大きなケースを担当する機会が増えた。そんな中、河野自身の考え方も変化が訪れる。元々、熊本 SJCD(吉永 修会長)に入会していた河野であったが、当時は“担当の歯科医師が入会しているから”という受身な理由であった。しかし、福岡に異動してからは、

「受身で参加させられている感覚ではもったいない」

と考えるようになり、福岡 SJCD(北園俊司会長)に入会する。そのなかで、上林 健氏(ナチュラル・セラミック)や西村好美氏(デンタルクリエーションアート)などといった歯科技工士と知り合う機会も得たという。いずれも著名な歯科技工士であるが、
「誰に対しても壁を作らず、対等に接されている」

ことに驚いたという。技術はもちろんだが、そういった人格に魅力を感じたと河野は語る。また、上林氏が技工を担当している書籍『前歯部審美修復』の天然歯編・インプラント編の2冊(小濱忠一著、小社刊)は、「分かりやすいステップが載っていて、臨床の中で直結して生きる本」

として何度も読み返した。その中にはアバットメントの立ち上がりなどの目視できない部分が明確に図示されており、アンダーカントゥアやオーバーカントゥアを具体的にイメージしやすくなったという。

こうして学んできたことによって知識・技術が向上し、それを“以前はリカバリーできなかったものができるようになる”といった形で実感できるようになっていった。

「そういった意味では、今のやり方は大きく間違っていないと思うので、このまま継続していきたい」

と河野は語る。

「もっと技工の魅力や楽しさを伝えることができたのではないか」

また、福岡営業所への異動によってラボの中での河野自身の立場も変化した。熊本では部署でもっとも下だったが、福岡に異動してからは逆に部署のトップとして後輩を指導する立場になった。しかし、急に立場が変わっても、後輩に対してどう接していいかわからない。結果、やる気も腕もあった後輩が会社を辞めてしまった。その原因は今となってはわからないが、「もっと技工の魅力や楽しさを伝えることができたの

ではないか」

と悔やんだという。後輩への接し方、その答えはまだでていないと河野は話す。歯科技工士の環境は、一般的な会社と比較すると独特な部分が多い。そういった環境に耐える人も、またそういった環境を好む人もいる。しかし、そういう人ばかりではない。ただ、この環境で10年以上働いてきた立場から、若い人に対して、「きつかったりすることはあっても、それに負けないくらいのやりがいや楽しさがある」

ことを絶対に伝えていかなければいけないと考えているという。それは決して“この環境に慣れる”ということではない。またその一方で、“徹夜が当たり前”など、歯科技工士界では半ば常識のようにいわれているようなことを変えていく努力をしていく必要もあると考えているという。そして、「歯科技工士としての常識と社会の常識、そのバランスを取りたい」

とこれからの目標を語った。

message from Dentist

患者により良い医療を提供するためのパートナー

河野さんとのお付き合いは私が勤務医の頃からで10年になります。当初は彼がコマーシャルラボのスタッフということもあり、お互い顔がみえない状況でしたが、同じスタディグループに所属して研鑽を続けていく中で、「やっと会えた」といった感じでした。歯科技工士向けの勉強会だけでなく歯科医師向けのセミナーにも参加するほど向上心旺盛な彼ですが、どちらかというとなんとなくと努力していくタイプです。また、センスある技術だけでなく、話し方やこちらの意図の捉え方などのフィーリングが合うことで、若い頃からコミュニケーションの取りやすさを感じていました。

彼の所属するラボでは複数のセラミストがおられま

すが、開業以来彼を指名しての依頼が多くなりました。院内ラボと違い、かねてよりコマーシャルラボの歯科技工士とは情報の伝達を含めたコミュニケーションを取ることに難しさを感じることがありましたので、河野さんとはほとんどのケースで診断、補綴物の設計、納期、患者の希望などを直接電話で打ち合わせしています。画像と模型が手元にある状態に加え、そうした情報を共有することにより治療のゴールの明確化ができるものと考えています。

まだまだお互いに発展途上ではありますが、より良い医療が提供できるよう努力していきたいと考えています。

徳田将典

とくだ歯科医院
福岡県春日市須玖北2-95-1

